

ライン. MB Orthop 1999 ; 12 : 1 - 7.

- 9) Spitzer WO et al. Scientific monograph of Quebec task force on whiplash-associated disorders : Redefining "whiplash" and its management. Spine 1995 ; 20 : 2 S-73S.

## ほっと ぷらぎ

### 「整形外科外傷医療の明日を考える」—先人に感謝し将来に備える

昭和50年に始まった「北海道整形外科外傷研究会」は第113回を数えるまでになりました。長きに渡り研究会が続き、会誌に記録を残していることは、青柳先生、荒川先生をはじめとした諸先輩の御功績によるものと深く感謝いたします。しかし、日本の整形外科外傷治療は欧州と比較してまだまだ発展途上だと思います。これは、日本の整形外科医の多くが「大学」に目を向けて生きてきたことが原因の一つでないでしょうか。昔のことを察するに、昭和50年に第1回目として症例検討会が開催された頃も「医育大学」は外傷治療に積極的ではなかったことでしょうか。大学病院では外傷治療が行われていなかったのですから当然のことです。しかし、この傾向は平成の時代になっても、延々と続いています。整形外科手術の50%を骨折を主体とした外傷が占め、日本以外の先進諸国では整形外科外傷学が独自性を持って発達しているにも関わらずであります。

実は欧州のなかでも、整形外科外傷学の発達が遅れていた英国も似たような歴史を歩んだようです。エンジンバラの外傷整形外科医 Court-Brown のエッセイを読むと、そのことがよくわかります (JBJS 1997)。1970年代の英国では整形外科医が「変性疾患」も「外傷」も取り扱っていたようですが、手術時期や段階的手術など外傷独特の治療戦略のため、「変性疾患」と「外傷」を両立させるには大変はずみがあったようです。その後「外傷整形外科」が変性疾患から独立して治療されるようになったようです。その歴史的経緯を日本の整形外科医はもっと知るべきではないでしょうか。

我々は自国の状況と、他国の歴史から学ばなければなりません。そして我々は変わらなければなりません。「外傷整形外科」を専門とする誇りを持ち、「巧みの技」に磨きをかけ、同時に「学術活動」を発展させていくべきです。運がよいことに、北海道には伝統ある「整形外科外傷研究会」があります。会の伝統を継承しながら変革することが先人の功績に報いる道だと思います。

札幌医科大学高度救命救急センター 土田 芳彦